

書 評

速水洋子・西 真如・木村周平編、『人間圏の再構築—熱帯社会の潜在力』（講座生存基盤論3）京都大学学術出版会，2012年，385p.

加藤敦典*

本書は京都大学GCOE「生存基盤持続型発展を目指す地域研究拠点」の成果である「講座生存基盤論」の第3巻である。

この書評では、著者らが掲げる課題にそって各論文を論評するとともに、本書の地域研究としての問題点についても論じてみたい。

本書の目的は「持続可能な生存基盤の確立のため、現在の人間圏を覆うパラダイムをアジア・アフリカの熱帯地域の諸社会から再考する」ことである（序章）。ここでいう人間圏は、ひとまず「人間を中心とした生存の領域」と理解しておけばよい。筆者らは、人間圏の再構想のため、以下の三つの課題を掲げる。

第一は、「人間存在を相互の関係性と配慮によって結びつけられるものとして見直すこと」（序章）である。この観点のもと、(1)アジア・アフリカ社会では、親密なケアの関係が家族のなかに押し込められることなく、社会の中心的価値になっていること、(2)そのためにケアの倫理が公共圏の活動と地続きで結びつきうるということが検討される。

各論文を見ていこう。ヒトの育児は、母子

の密着を特徴とする。しかし、「ヒト本来の子育て」が観察可能とされるアフリカの狩猟採集社会においても、子どものケアは、母子関係を越えて、親族、近隣住民へと広がっている（高田明論文）。また、カンボジア農村では、子どもや高齢者が世帯をまたいで頻繁に移動する（佐藤奈穂論文）。佐藤は、世帯間のヒトの移動に基づくリスク対応に注目することで、伸縮する親族の生存基盤としての意義を指摘する。同様に、遠藤環は、バンコクの下層民居住地区がもつリスク分散機能を、居住面（家族構成や家計状況の変化に応じた家屋の増改築の容易さなど）と生計面（零細事業の始めやすさなど）から分析し、伸縮する自生的コミュニティの生存基盤としての役割を指摘する。

伸縮する親密圏について論じる際、これを単に熱帯社会の特徴として論じるのではなく、グローバルな時代状況のなかで捉えることが重要である。速水洋子が指摘するように、東南アジアでは、先進産業社会のような家族の囲い込みが起こることがないままに、産業化・少子高齢化が進行している。そのため、現代のタイでは、理想化された小家族にケアの責任を担わせようとする国家政策と、出稼ぎ民の切実なニーズに基づく、家族を越えた二者関係によるケアの実践とのあいだで齟齬が生じているという。

しかし、このような顔のみえる関係のなかから、公共圏への訴えかけが拡がりつつあるという側面もある（速水論文）。吉村千恵は、能動的に人びとに繋がるタイの障害者たちの主体性に注目する。タイの地域社会におい

* 東京大学教養学部東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ

て、障害者は単なるケアの受け手ではなく、むしろ地域の重要な消費者であり、また地域の潜在力を活性化し、親密で開放的な関係に基づく公共圏の拡大を導き出す主体なのだという。

これらの研究から、家族に囲い込まれない親密圏の実践をケアの制度として結実させる方法について、さらに踏み込んだ提言ができればおもしろい。

本書の第二の課題は、熱帯社会における人間圏のレジリエンス（前向きの適応能力）への注目である。著者らによれば、熱帯社会では、人間と環境の関係が不安定で、それゆえに、社会の脆弱性をポジティブに転換する倫理と実践を育んできたという。ここでのポイントは、リスクとなりうる他者との肯定的な関係性の構築である。

西真如は、エチオピアの農村を事例に、HIV感染者と非感染者の共存の可能性の条件をさぐる。HIV感染者は、社会にとっての疫学的なリスクである。しかし、人びとは彼らとの接触を保ち、陽性の女性たちの出産を支援する。それを可能にしているのは、陽性者であることを明かして周囲にリスクを告知する感染者たちの配慮と、それに応答する周囲の人びとの配慮であり、また、出産を望む陽性者の立場に立とうとするヘルス・ワーカーたちの努力である。生命への配慮に基づく彼らの行為は、リスクとなりうる他者との肯定的な関係の構築を可能にし、社会のレジリエンスを高めている、と西は指摘する。東アフリカの牧畜社会では、「敵」集団の成員との「友人」関係は、しばしば敵地で苦境に

おかれた相手を自家に迎え入れることを契機に形成される（佐川徹論文）。苦境に立つ他者を、リスクを冒して受け入れる態度は、西の事例とも共通している。インドの仏教改宗者は、自分たちにとってのアイデンティティの他者であるヒンドゥー教徒との関係の構築をめぐる揺れている。舟橋健太の論文は、仏教改宗者の希求する「平等」の多相性に注目し、彼らのあいだに、カーストの不平等性を敵視する動きとともに、相手の信仰を尊重しつつヒンドゥー教徒と対等な関係を築こうとする動きがあることを指摘する。

山越言の論文も、リスクとしての他者との距離のとりかたについての論考として読むことができる。山越は、野生チンパンジーの観察拠点として有名な西アフリカの小村を事例に、住民とチンパンジーの関係性が科学知との出会いによって攪乱される状況を描く。在地の人びとにとって、チンパンジーは身近な聖なる動物であるとともに、実生活上の害獣でもある。そのため、人びとはチンパンジーとの適切な距離のとりかたの知恵を育んできた。しかし、その知恵は科学知にとってはブラックボックスのようにわかりにくい。山越の論考は、他の論文とともに、他者との共生に関する在来知への謙虚な学びの姿勢を説くものだといえる。

これらの論考は、ここ十数年来、人類学がさかんに議論してきた「差異における共同性」についての議論をさらに押し進め、リスクをあえて受け入れることでよりよい社会を築こうとする、人びとの未来志向の投機に焦点をあてている点が評価できる。

本書の第三の課題は、科学知と在来知の接合により、人間圏・生命圏・地球圏の共存を可能にする技術と制度をさぐることである。近代社会は人間が一方的に自然に働きかけることで生産性の向上をはかってきた。しかし、その温帯的な生産重視の社会は行き詰まりつつある。いまこそ、熱帯的な視座から、人間圏・生命圏・地球圏の関係性を再構想することが必要だと、著者らは指摘する。ここでは、とりわけ自然の制御と利用が焦点となる。

孫曉剛論文は、北ケニアの放牧社会の事例から、自然災害のリスクが増大する乾燥地域において、干ばつ早期警戒システムをどのように活用すれば、干ばつリスクの回避・分散に関する在来知をサポートできるかを考察する。熱帯社会の潜在力を引き出す科学知の可能性を正面から考察した論文である。

篠原真毅・木村周平論文は、宇宙への生存圏の拡大をめざす科学技術の社会的な実施可能性を、宇宙太陽発電を事例に検討する。宇宙開発には、きわめて多くのアクターの合意が必要である。その合意形成には、人類全体の生存と科学技術を結びつける政治の力が必要だと筆者らは指摘する。

常田夕美子・田辺明生論文は、生存基盤をめぐる合意形成の政治について、さらに踏み込んだ提言をおこなう。筆者らによれば、人・モノ・生物の関係性に基づく社会を構築するためには、人間がモノを所有するという仮構を超えて、私的所有制度に基礎をおく代議制民主主義にかわる新しい民主主義を構想する必要があるという。筆者らが紹介するイ

ンドのボーキサイト鉱山地区における反対運動は、「非政党政治」を展開することで、代議制では表象されにくい多様なアクターの対話の場をつくりだしている。それらの運動からは、土地や資源の所有権ではなく、生存基盤たる自然を持続的に利用する権利を主張する人びとも登場している。

これらの論考からは、自然を所有することなく、自然に育まれて生きる社会を構想するためには、倫理の見直しだけでなく、人と人との対話の場としての政治制度の見直しが必要だということがみえてくる。

本書は「構想」ということばが頻出することからもわかるように、きたるべき社会のために積極的な提言をおこなう立場をとっている。アジア・アフリカ社会の倫理と実践に基づいた各論文の主張は、生産重視型社会の行き詰まりを乗り越え、きたるべき社会をつくるための提言として、アクチュアルな説得力をもっている。

他方、地域研究としてみた場合には、熱帯社会という概念の危うさが気にかかる。たしかに、「先進国」対「発展途上国」というような経済システム中心の区分よりも、「温帯」対「熱帯」という枠組みのほうが、人間圏・生命圏・地球圏の関連がみえやすくなる。しかし、気候帯に基づく地理区分を土台として人間と自然の関係を論じようとするならば、どうしても風土論的還元論に接近してしまう。また、「生産」と「生存」を対比させるために「温帯」と「熱帯」の対比を象徴的に用いるのであれば、一種のオリエンタリズムに接近してしまう。もちろん、各論者はこれらの危

険を認知しており、気候と社会の因果関係を安易に想定したり、熱帯社会を自社会の批判のために理想化したりすることを慎重に回避している。しかし、だとすれば、あえて熱帯社会をタイトルに掲げるだけの必要性はあるのか、という問題がある。気候帯としての熱帯社会に特有の現象を、人間圏の再構想という課題に結びつけて論じ切っているのは、孫論文だけではないだろうか。熱帯社会という地理的な枠組みに基づく地域研究をさらに展開していくためには、生態・地理条件に基づく長期持続を基調にしつつも、本書のなかでも何人かが試みているように、人間圏の中期的な社会変動をとりわけ丁寧に描くことが必要だといえる。

黄 蘊.『東南アジアの華人教団と扶鸞
信仰—徳教の展開とネットワーク化』風
響社, 2011年, 350p.

北澤直宏*

本書は、マレーシア、シンガポール、タイにおける華人民間宗教結社の発展過程を上記3カ国の社会的文脈の下に分析し、そこにおける移民—宗教関係を考察したモノグラフである。華人宗教はこれまでも多くの研究蓄積のある分野であるが、儒・仏・道・民間信仰の混合や寺院・廟・会館のような類似施設の重層的な存在は、曖昧さと多義性という側面から研究者を悩ませてきた。

本書は幅広い地域・組織を扱っているが、

なかでも主な考察対象となるのはマレーシア・ペナンにある徳教団体である。徳教とは扶鸞という交神術から得られる託宣を核に1939年の中国潮州で誕生した宗教慈善結社であるが、近年は文化・教育などの領域へ進出しており、類似の宗教結社と比べてもその発展は著しいことが特徴とされる。

まずは序章を通して、本書の問いを概観する。華人の信仰は普遍主義を掲げる傾向があるものの、実際には華人性が濃く、その閉鎖性は否めない。このような特徴は異国において彼らの民族性（華人性・潮州人性）の維持に大きく貢献してきたことは事実としても、その伝統の維持が過度に論じられてきたきらいがある。これに対し本書は、当該国の社会状況と華人結社自体の変化に着目し、なかでも宗教実践をみることの重要性を指摘する。いかに徳教が教団化され、独自の変化を遂げたか、そして教団のイデオロギーはどう変化しているのか。これが本書を貫く問いとなっているのである。

以下では、序章と、簡単な総括が行なわれる終章の間に存在する1-6章について、順に整理していきたい。1章「徳教の前史—扶鸞結社と徳教」では、中国本土における徳教誕生の背景が歴史的な視点から考察される。清代から始まった社会不安と儒教的教化の勃興は、多くの慈善団体・宗教団体を誕生させた。その担い手となったのは旧秩序体制を支えた士紳階層であり、それに権威を与えたのが扶鸞である。扶鸞自体は古来より行なわれてきたものであるが、19世紀末から広がった末劫説はこの全国的な流行を生み出し、特

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

に潮州地方では儒教的価値観をもった商人が、道徳・宗教・慈善の要素を含んだ扶鸞結社の活動を支えるまでになっていた。そのようななか、初期の徳教は「伝統的倫理教化を可視化」(p. 90) するものとして誕生し、やがて社会主義化した中国での活動とは対照的に、東南アジアでその活動を活発化させていくのである。

2章「東南アジアの華人コミュニティと華人民間教派の展開」では、3カ国における華人コミュニティの発展と、そのなかで商人層が果たした役割が分析される。移民先において華人たちが方言・出身別にまとまり、さまざまな互助組織を形成することは珍しくない。その結果誕生したさまざまな華人組織に共通しているのは、その頂点に立つのが例外なく商人層であることである。儒教とは相容れないこの特徴の説明として、著者は経済的成功を目的として海外進出した華人にとって、その関心は経済面にこそある点を指摘している。また、他にも共通する傾向として、宗教的知識の欠如や人材不足に対する改革が迫られていることが示される。これら諸問題への対応には組織ごとに差異がみられるものの、その混沌にこそ華人結社が有している伝統の非完全性を垣間見ることができるのである。

3章「マレーシアにおける徳教の教団的展開」では、マレーシアにおいて特に徳教の発展が著しい理由が考察される。商人が主導する教団の活動は世俗的なものが主であり、それを通して彼らは社会的ネットワークを構築するだけでなく、名誉・威信を得ることに成

功している。徳教のこのような特徴は信者の需要や社会状況への適応を容易にさせており、次第に類似団体との差異化を図り、組織を整え文化活動にも進出させる要因にもなっていった。これは徳教が抱える伝統が少なかったからこそ可能となったものであり、現在の発展の礎ともなっている。しかし一方で、求心力が託宣にあり続けたため「一部華人住民の関係性の上に成り立っている」(p. 185) と表現されるように、組織としての不安定さは否めない。

4章「徳教と潮州人性、商人イデオロギー、または神意」では、徳教がいかに地域社会で定着していったのかが説明される。商人の影響力は扶鸞に携わる宗教職能者すら凌ぎ、教団人事だけでなく託宣の内容にも影響を与える。しかし同時に神意が絶対性を有し続けているのも事実であり、商人たちは多額の寄付金を通し教団運営を支える代わりに神の庇護を得るといふ、互酬的な関係を築いている。著者は、この関係を人神共同と呼び、権力をもつ一方で神意にも導かれる商人たちの現状を指摘する。そこにおける宗教職能者とはあくまで二次的な存在であり、中心にあるのは潮州人性、商人性である。歴史的にも潮州系商人の人脈が徳教の拡大に寄与してきたことは事実であり、今日もネットワークこそが新規参入者の増加に貢献しているのである。

徳教教団は拡大に成功したが、同時にそのイデオロギーをめぐる論争が活発になり、近年は教団の宗教性を強化しようとする傾向が生じている。その過程と背景を考察したのが5章「徳教の教団イデオロギーをめぐる論争

と教団建設」である。その際に論点となったのは扶鸞の廃止・理論化の是非であった。本書ではその背景として、世俗的なものだけではなく精神的な充足感をも求めるようになった商人層が教団の将来に不安を抱き、理論化・宗教化を望むようになったことが示されている。しかし一般信者は依然として扶鸞のみ関心があることから教団内部に矛盾が生じ、一部団体では扶鸞の復活も起こっている。確かに近年は理論化の推進・教理建設・書誌編纂・中国本土へのルーツ探し等も活発になってきてはいるものの、やはり依然として徳教団体間の統一は実現されていない。

6章「徳教のトランスナショナルな拡大とネットワークの建設」では、今日における徳教団体同士の相互欠如と連帯から、華人宗教結社の特性が考察される。組織の中心にある商人層は、彼らは自分たちの「需要や知識レベルに合わせた」(p. 304) 教団を形成し、発展させてきた。80年代からは世界的な徳教大会が開催されるようになり、各国の関係者の連帯が図られているものの、やはり統一性の欠如は否めない。しかし筆者は、その組織的せい弱性が華人宗教の発達を促していると指摘する。このような発展過程や近年の動向を分析したうえで、著者は華人宗教の本質を、教理の深化ではなく、拡大過程におけるネットワークの形成に見出しているのである。

では、本書の特徴とは何なのであろうか。当該社会における華人コミュニティの描写が秘めている価値については言及するまでもないので、以下では敢えて別な視点から付け加

えることにしたい。

本書は、「一般的な定義を求めるというものではない」(p. 31) と前置きをしているように、宗教実践を描いたものである。しかしながらその背景にあるのは、西洋基準による宗教観が浸透する前にあった、伝統的な華人信仰の形を明らかにしようとする著者の姿勢である。しかし彼らの信仰は判別し難く、実際に本書の記述からみえてくるのも華人教団が抱えている混沌性と流動性である。しかし本書はその指摘に留まるだけでなく、組織としてのせい弱性や潮州系商人たちのネットワークを丹念に描くことで、その雑多性を前提とした組織の拡大過程こそが華人系宗教団体の本質であると論じることに成功している。他団体との緩やかな連帯と相互扶助を通して徐々にネットワークを拡大していく機能に華人の宗教性を求めたことは注目に値するものであり、これは中華圏の宗教を考察していく際に有効な概念として、今後の研究に大きく寄与していくものと思われる。

2点目は、第5章の主題ともなった扶鸞の是非を巡る論争に関係する。これは不安定な託宣を放棄し教団の組織化・合理化を図ったものであり、大きくいうとカリスマの日常化が焦点となっている。従来カリスマを述べる際には血筋や役職に焦点が当てられてきたが、このような託宣の存在も無視できるものではない。本書はこの運動の担い手や社会的背景まで分析しており、これは現代における宗教の変化を考察しようとする、著者の視野の広さを示すものである。尤も教団と個人間の葛藤は継続中であり、これだけでは単純に

徳教が合理化へ向かっているとは言い難い。しかし読み手に対して教団の今後更なる変革を予感させる描写の数々は、本書がいかにか意欲的なモノグラフであるかを表しているといえるだろう。

次に問題点について述べる。それは徳教の核でもある扶鸞の扱いであり、そこに一貫性が欠けていたことが、教団外部に存在するはずの華人コミュニティに関する描写を犠牲にしまったように思われる。穿った見方になるが、そもそも部外者にとっては全ての託宣が人為的なものでしかない。確かに、扶鸞に現れる神意に人意が介入する可能性は言及されているが (p. 84, p. 164, p. 214)、それでは何故黎明期の扶鸞の多くは無批判に引用されているのかとの疑念が浮かぶ。また今日の一般信者の宗教実践に関しても、位階制の存在や神の万能性を示唆するだけでは、その影響力の理由を十分に説明できるとは言い難い。敢えて教団を去っていった者や、扶鸞の肯定・否定の裏にある世俗的な側面について重層的な記述をすることで、より説得力を増すことが可能だったのではないだろうか。

しかしながら、これは本書の価値を損なうものではなく、宗教人類学を基本としながらも宗教社会学まで射程に収めている幅広さ故に生じた問題であろう。3ヶ国の華人社会における、多くの類似組織を比較調査した著者の視点・手腕は感服に値するものであり、本書が多くの領域から関心を集めることが可能な一冊であることは間違いない。今後、より長期的な考察がなされることを願ってやまないものである。

須永和博. 『エコツーリズムの民族誌ー北タイ山地民カレンの生活世界』 春風社, 2012 年, 435 p.

田崎郁子 *

カレンはタイ国に居住する少数民族として最大の人口を占め、タイで「山地民」と称される人々の位置づけを考える際に重要な存在である。カレンと森との関りや生業のあり様は、常に民族表象と結び付けられて語られてきた。特に 1980 年代以降、タイでの環境保護運動や NGO 活動の高まりを背景に、NGO や一部の指導的なカレンらが土地権主張の運動を展開し、森と共生する知恵をもつカレン像を強調するようになると、これに関する人類学的研究も蓄積されていった。しかし、近年のカレンの森林利用や環境運動との関連で民族表象を取り扱った先行研究では、その政治的意義を「社会的弱者による抵抗か、外部者によるカレンのロマン化か」と大局的に論ずる傾向にあった。そしてここでは、実際に運動や言説が一般のカレンの人々にどのように受容され影響を与えてきたのかが見落とされてきた、と著者は指摘する。これに対して本書は、カレンの人々が村で携わるエコツーリズムの実践を例に、観光と森林利用や少数民族であることへの関りをめぐって生起するさまざまな立場の人々の交渉や調整に焦点を当てている。それによって、ミクロな視点から上記の二項対立には回収されない少数民族のあり方を示し、ローカルな生活

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、日本学術振興会特別研究員 (PD)

の再編過程に迫ろうとしている。

第1章では本書の理論的展望が示されている。エコツーリズムという現象は、多様なアクター間の交渉や協働を含む複雑な社会関係の中で生起する。そこで本書の目的として、国家やグローバリゼーションといった権力作用と行為主体の実践との関係に着目し、その社会的・文化的交渉のプロセスを記述することが掲げられる。著者は、エコツーリズムという言説には、環境保護に市場価値を見出して商品化しグローバルな市場経済原理へと回収していく傾向があるために、エコツーリズムを観光のあり方の「新しい何か」として扱ってしまうと権力作用がみえにくくなる恐れがあることを指摘する。同時に、貧者がうたう「森との共生の知恵」をローカル社会による抵抗として単純化することを避けるために、「観光によって不平等な関係が再生産されてきたという議論と…『抵抗』を主題化する議論は、相容れないものではなく、むしろ観光をめぐる両者が交錯しあいながら複雑な社会関係が形成」(p. 84) されていく、そのプロセスに着目するべきだと主張する。

第2章では、タイの国民国家形成の歴史を辿りながら、西洋的なネーションとしての均質な「タイ人」が創出・構築されていくのと表裏一体に、カレンが少数民族として周辺化されてきた過程を示している。19世紀から20世紀初頭にバンコクを中心とした中央統治化が進行する中で、カレンと北タイ王朝との貢納関係が断たれ、ローカルな民族関係が忘却されてきたこと。さらに1950年代以降に領域統治の概念が北部山地まで浸透し、

国境の政治的重要性が増す中で、多様な背景をもつタイ北部の非タイ系民族は「山地民」と一括されたこと。そして「タイ化されるべき他者」へと位置づけ直され、教育・仏教・開発など多岐にわたる山地民政策の対象となってきた過程がまとめられている。

第3章では、タイにおける森の資源化と山地民の周縁化の歴史の中に、エコツーリズムを位置づけている。19世紀から始まる王室森林局主導の政策では、森はチークなど貴重な経済的資源を有するものだと捉えられていた。それが1950年代以降西欧的な自然保護思想や森林減少に直面する中で、手つかずの原生自然がもてはやされるようになり、政策は森林保護へと転換する。同時にカレンをはじめとする山地民は森を破壊すると非難された。これに対して、90年代に入ると山地コミュニティによる慣習的森林利用権や土地権を求める運動の中で、「森を守る山地民の在地の知恵」が語られ始めるようになる。そして、タイではこの中から、森と森を守る文化を資源とみなすようなエコツーリズムが、地域コミュニティの計画立案・運営への積極的参加のもとで展開する独自のものとして生まれてきた。著者は、このようにエコツーリズムの政治性を明らかにしたうえで、「(エコツーリズムという現象を) 植民地主義から今日のグローバリゼーションにいたる森林の資源化の一形態として、その歴史的流れの中に位置づけることで相対化する必要がある」(p. 191) と主張する。

第4章ではタイの山地社会が観光というマクロなシステムに巻き込まれてきた歴史的

過程を考察している。タイ人らしさや国民文化を演出する国家主体の観光政策における公式イメージとは別の文脈で、山地民観光の資源化は、70年代頃から、未開文化を求める先進国ツーリストのまなざしと、そのまなざしに着目した平地タイ人の仲介者らによって発展してきた。90年代に入ると政府も山地民観光へ注目し始め、王室プロジェクトを中心とした観光開発が促進される。さらにNGO支援のもとで、ホストとなる地域社会が観光の開発・運営に積極的に関って、利益を地域に還元すべきであるという考えに基づいたコミュニティ・ベース・ツーリズム（以下CBT）が生まれる。

続く第5章では、CBTの一例として北タイのカレン社会における観光実践が考察される。調査対象である2つの村の生業は水田・焼畑を中心とした稲作、畜産や出稼ぎから成る。高まる現金収入の必要性の中で、CBTは貴重な収入源のひとつである。両村で90年代後半以降に導入されたCBTによって村を訪れた人々は、カレンのローカルガイドとともに、彼らの語る在地の知恵に耳を傾け、カレン文化を学ぶ。村ではグループを作ってCBTの管理・運営にあたる。そしてNGOの支援を元に、ツーリスト受入れにあたっての、カレン文化の提示の仕方などといった特定の知識や技能を習得し、村人はローカルガイドとなっていく。著者はその過程を描写しながら、当初CBT導入に不安のあった村人が、観光という近代に参加することの自信や誇りをツーリズムに見出そうとしたり、自らの文化を再発見していると評価する。さら

に、こういった知識や技能は、単にツーリストの欲望や西洋的な環境保護思想に迎合するために「観光という文脈でのみ生産されているわけではなく…資源利用における様々な慣習的实践を環境保護の枠組みの中で再解釈することを通じて、『森林保護者としてのカレン』というアイデンティティを構築し…それが森林局をはじめとする政府機関との森林利用権をめぐる交渉のツールとなり、カレン自身が持続可能な森林利用を意識化することにもつながっている」(pp. 342-343)と論ずる。また、村人は、他の生業に比べてはるかに高収入であるCBTへの参加頻度を、月に1-2度以上には高めようとしなない。ここから、利益の最大化や拡大再生産といった資本主義的論理に絡めとられたり、ルーティン化された労働に転化することなく、村人にとって「楽しく」「非日常的な」体験として観光を維持する人々の志向性を読み取っている。

第6章では、カレンの人々がミクロなレベルで環境運動やエコツーリズムに関することで、資本主義的開発のリスクや政府主導で行なわれてきた森林政策などを学習し、個々の状況に制約を受けながらも、従来の山地民政策や森林政策で否定的に位置づけられてきた「カレン」「山地民」「焼畑」といった存在を肯定的に捉え直す過程を、多様な立場の人々の実践から明らかにしている。

本書前半では、それぞれ山地民、森林の資源化、観光というキーワード／現象が、タイ社会の政治的・歴史の変遷の中で定義・解釈されてきた過程を辿っている。そして、その中から山地民を対象にしたエコツーリズム

が生起してきたことを示している。ここでは、タイのカレンを考える際に避けては通れない、森林政策や環境運動をめぐる言説とその中でのカレンのあり方についての全体像が、3つのキーワードに沿った歴史の変遷として丁寧に整理されている。特に従来の先行研究においてはそれぞれの著者の興味の方向性に引っ張られて論じられてきた諸処の議論が、二次文献を綿密に検討することで通史的にまとめ直されている。本書は、東南アジア山地社会に興味をもつ評者のようなものにとって非常に貴重な参考書となるだろう。また、後半の5、6章は本書のハイライトともいえ、フィールド調査に基づいた民族誌的記述によって観光や環境運動を通じたカレンの多様な自己形成過程が明らかにされている。ここでは、先行研究を丁寧に辿ることで、森林破壊者として周縁化されてきた少数民族の人々の「森と共生する知恵」を鼓舞するような潮流に関して、それを政治的弱者による抵抗かあるいはカレン文化のロマン化か、で論じてきた従来の二項対立的な議論の問題点が指摘されている。そして、ミクロなレベルから人々の実践のあり方を描くことでこれを克服しようとしていることは大変興味深い。

さて、最後になるが、評者はキリスト教宣教と市場経済化の観点からカレンの社会変容に関心をもっており、そうした視点から敢えて気がついたことを述べてみる。民族誌的な記述が中心になっている5、6章では、カレンの人々にとってエコツーリズムや環境運動に携わることのプラスの側面の強調が目立つ。そのため、言説を作る社会（あるいは

作られた言説）VS それに対応するマイノリティとしてのカレン、という対立的な構図が見え隠れする。それが、本書の結論部において、権力側からかぶせられてくる言説や市場経済化といった不可避なものへと絡め取られないようなカレンのあり方を無批判に自律性（p. 404）として描くことにつながっているように思われる。けれどもこれでは、著者の意図する「多様なアクター間の交渉や協働を含む複雑な社会関係」や「社会的・文化的交渉のプロセスを記述すること」がみえにくくなるのではないか。おそらく著者が村でエコツーリズムに積極的に関わっている人を中心に調査を進めたがゆえに、この動きに周縁的な人がどう関わっているのか、という点は本書ではあまり言及されなかった。しかしたとえば、村の中心から周縁までどのような多様な立場があり、権力関係も含めた村の中の関係性との絡み合いで彼らがエコツーリズム導入による変化にどう関わっているのか、あるいはエコツーリズムや環境運動への関与が村の社会関係をどう表出させ、それが村の生活の再編をどう促していくのか。このような点に着目してみたら、弱者による抵抗か伝統文化のロマン化かという二項対立を脱却しようとするがゆえにそこに議論そのものが絡め取られてしまうような状況に陥ることなく、カレンの人々がおかれている現状をより説得的に描き出せるのではないだろうか。

とはいうものの、これで本書の価値が損なわれるわけではない。前半部でタイ山地研究を貫く重要な問題点を分かりやすく整理しているため、本書の内容は門外漢でもその背景

を理解しながら読むことができる。山地研究者のみならず、観光やエコツーリズム、少数民族、森林資源などに関心をもつ幅広い読者にとっても興味深い議論を提示しており、広く勧めることができる。また、著者の示す、エコツーリズムや環境運動が一般の人々にどう受容されているのか、という問題提起は、2010年にカレンの焼畑をユネスコの世界遺産に登録するための委員会が立ち上がった現在、そしてカレンの人々がおかれている状況の今後を考えるうえでも非常に重要である。タイのカレン社会を研究する後輩として、著者の今後の展開にも期待したい。

鈴木正崇. 『ミャオ族の歴史と文化の動態—中国南部山地民の想像力の変容』風響社, 2012年, 560p.

宮脇千絵*

本書は、中国西南部に居住するミャオ族の儀礼活動に焦点を当て、ミャオ族が豊かな想像力でもって培ってきた世界観を描くとともに、それが近年の経済的発展や政治・社会状況の影響などによりどのように維持されているのか、あるいは変化しているのかを記述している。

本書は八章から成り、1988年から2010年のあいだに発表された9本の論文をもとにした集大成である。以下に各章の内容の簡単な紹介をし、評者の見解を述べる。

第一章「ミャオ族の神話と現代—貴州省黔

東南を中心に」では、ミャオ族の神話の変化と差異性が宗教文化の再構築に果たした役割について論じている。著者によると文字をもたないミャオ族の神話は豊かな想像力を原動力とする口頭伝承で伝えられ、儀礼と連続性をもっていた。しかし、1980年代以降の「民族文化」を重視する動きの高まりのなか、民族意識の再構築の源泉として、民族エリートや知識人によって、神話が文字テキスト化される。これにより、神話が画一化され、儀礼との連続性が失われ、さらには神話が読み替えられることによって新たな言説が創造された。新たな解釈が儀礼や日常生活に浸透することを、著者は「可視化される神話」と呼び、それが、無文字という「周縁」、地理的「辺境」を生きるミャオ族の中心に対する対抗言説であると同時に、宗教文化の再構築の道であることを示唆している。

第二章「祖先祭祀の変容—貴州省黔东南雷山県烏流寨の鼓社節」では、13年に1度おこなわれる祖先祭祀である鼓社節について1997年に調査した事例をもとに詳細に描き、既往文献との比較検討をおこなっている。そして過去と現在の鼓社節の共通項として、木鼓叩きと水牛の供犠の重視があることを指摘している。一方で、変化もしている。鼓社節を支える組織は、祖先を同じくする父系親族集団であったが、現在その担い手は、血縁から地縁へ、そして行政の関与へと移行していること、ならびに経済や社会の変化の影響を受け、客人への土産があつた世の祖先を満足させるための水牛の肉から、この世の人びとの身近にある豚肉へと変わったことも指摘し、

* 国立民族学博物館・外来研究員

改革開放以後に新たに復興しつつある鼓社節は、かつての想像力に支えられた世界観に基づく儀礼とは異なっていることを示した。

第三章「死者と生者—貴州省黔東南三都水族自治県小脳村の鼓社節」では、1999年の調査に基づき、生者と死者の関係に焦点を当て、鼓社節の葬送儀礼としての側面を取り上げている。祖先祭祀である鼓社節には、死者と生者の関係を再構築し、この世の生活を活性化するという役割がある。しかし生活様式が変わった現在、水牛の供犠による供宴の慣行は継続しているものの、死者や祖先の靈魂を迎えるという意識は弱まっていること、さらに観光化によって、観光客向けにおこなう儀礼と、村人の慣習による儀礼とのあいだに摩擦がおこっており、想像力の世界がどう変化しているのかを分析している。

第四章「ミャオ族の来訪神—広西壮族自治区融水苗族自治県の春節」は、自称タムー（他称は青苗）と呼ばれる人びとが暮らす村々を春節に訪れる来訪神の儀礼、蘆笙の祭り、祖先祭祀などを1993年のデータに基づいて検討し、春節という農事暦を区分する「境界の時間」での、儀礼を通じた人びとの時間認識の形成とその変化を考察している。経済発展や観光化によって、春節期間の親族との交流や男女の恋愛に漢族の時間概念が浸透していること、そして「民族文化」の再構成のため地元政府の働きかけで再編された祭りが増えていることを指摘し、正月行事に表出されるミャオ族の時間認識が変化している様子を描いている。

第五章「ミャオ族の巫女さんたち—湖南省

麻陽苗族自治州の場合」は、漢語で「仙娘」と呼ばれる巫女に焦点を当てて、1998年時点での彼女らの活動と、世界観の諸相を明らかにしている。「仙娘」は、「走陰」や「差七姑娘」という活動を通じて想像力の世界であるあの世に行き、そこで神霊や死者の霊と交流する。著者は、今まで報告が少なかった都市部に住む「仙娘」の実態と、そこを訪れる相談者の依頼による「走陰」や「差七姑娘」の活動内容を見聞に基づいて記述することにより、仙娘の存在意義の背景には、都市と農村の交流の活発化という現象があることを指摘している。

第六章「龍船節についての一考察—貴州省黔東南台江県施洞鎮」は、龍船節と姉妹節という、観光現象に最もさらされている祭りに着目しそれぞれの由来譚を紹介したうえで、龍船節と姉妹節をそれぞれ鼓社節と比較している。龍船節は、他の祭祀と同様に、ミャオ族の生活を成り立たせる秩序を再構築するとともに、より新たな人間相互の結びつきを獲得する機会だとされる。しかし2000年代以降の観光化によってその象徴的な意味が失われ、祭祀が経済的活動に取り込まれていったり、口頭伝承の文字テキスト化によって、豊かな想像力の世界が固定化され一元的に流通したりという状況がみてとれることを論じている。

第七章「銅鼓の儀礼と世界観についての一考察—広西壮族自治区南丹県」では、白褲瑤の人間観・社会観・世界観が凝縮されている銅鼓を取り上げている。ヤオ族に分類される白褲瑤を著者が取り上げるのは、言語や習俗

からみると白褲瑠はミャオ族の系統と考えられるからである。銅鼓は父系血縁集団によって所有され、単なる楽器ではなく葬送儀礼においてあの世とこの世を結びつける機能をもつ。興味深いのは、彼らは銅鼓を生産せず市場で購入することである。使用に特化しているために、逆にその音色には彼らの想像力が多分に凝縮されていると著者は指摘している。

第八章「貴州省の観光化と公共性—ミャオ族の民族衣装を中心として」では、グローバル化に伴う観光化に焦点を当て、社会の新たな「公共性」との接合や葛藤によって、記号性や象徴性といった想像力の媒体であった民族衣装が日常の文脈を離れ、その意味を再構築しているさまが描かれている。その事例として、貴州省黔東南州と雲南省文山州が挙げられている。前者では、民族衣装が観光客の「まなざし」によって日常着から商品へと変化している様子が、後者では、日常生活の文脈において普段着が既製服へと移行し、海外へと販売されている様子が示されている。ともに外部の介入、意味や機能の変化が指摘され、グローバル化と公共性によって伝統の変化と再編を論じている。

以上みてきたように、本書で描かれているのは、ミャオ族の儀礼や生活文化における伝統と、口承の文字テキスト化、政治の介入、観光化やグローバル化などの要因による、ミャオ族の想像力に裏打ちされた神話世界や象徴性の変化や再編である。本書の現地調査による実証的で詳細な記述、特に丹念で克明な儀礼の内容の報告は、参照価値の高い民族

誌として読み継がれていくだろう。以下、評者が感じたことを述べたい。

本書の特徴は、広範な地域の、さまざまな自称のミャオ族の支系の事例を取り上げていることである。改めていうまでもなく、ミャオ族というのは「民族識別工作」により定められた集団であり、その内実は多様な集団の集まりである。しかし、多様な下位集団の事例の併記は、視点や内容の一貫性が確保しにくくなるというリスクを有する。著者自身もそのことは十分認識しており、「各章の方法論は一貫しておらず、それぞれ単独の論考として読むことができる」(p. 12)と断ったうえで、多岐にわたる内容を整合させるため「想像力」という概念を導入している。各章では、鼓社節や葬送儀礼、正月行事や巫女の活動などの原動力としての想像力の世界の豊かさの記述と、その変容に重点がおかれており、著者のいうように、「過去から現在への変化の動態と、今後の行方を考察するという時間認識を包括するための概念」(p. 2)として有効である。ただ欲をいえば、全章を貫く総括を著者がどのように準備していたのかを知りたかった。それがあれば、想像力という概念をもって多様な事例を併記した意味がより効果的にあらわれるとともに、個々の事例の共通性と独自性が一層明確になっただろう。経済的・社会的変化の波は、時間差こそあれどの地域にも同じように押し寄せている。それは各事例で共通している。だがその対応には、それぞれの地域や下位集団によって、著者が描いているよりもっと独自性がみられるのではないだろうか。

その一例として、評者の研究内容にひきつづき指摘すると、第八章では民族衣装の変化として、貴州省の自称ムーと雲南省の自称モンの事例を混合させて記述しており、ムーの事例に基づいて、モンの実態を解釈しようとしているように感じられた。たとえば、「グローバル化の影響によって生活着であった民族衣装が、商品となり、生活の文脈から切り取られている」(p. 475)、「衣装は現在では自らの集団や他の支系に対しての自己表現の機能を喪失させ、イベントや観光客向けのデザインを競う道具となった」(p. 488)との記述があるが、少なくとも雲南省においては、モンの人びとの生活の変化に沿った彼ら自身の取捨選択の基準が存在しており、彼ら

の生活の文脈とは断絶していないと評者は考えている。

とはいえ、本書の現地調査に基づいた記述の詳細さは圧倒的である。現在、外国人調査者の滞在が以前よりも可能になり、インテンシブな調査による成果の蓄積がすすんでいる。多様なミャオ族の全体像を描くことよりも、個々の事例の詳細を積み上げていくことが今後の趨勢だとすれば、本書による広範囲を網羅した民族誌的記述は、その課題に取り組むための比類ない指南書となる。大著である本書が、評者を含めこれからの中国少数民族研究の一翼を担う者にとって、最良の手引きとなってくれることは間違いない。